

### 第3群 座長のまとめ

旭川医科大学 耳鼻科

海野徳二

ネブライザーによる鼻副鼻腔疾患の治療は、歴史的にみると抗生剤溶液を用いて始められたが、近年では副腎皮質ホルモン剤、消炎酵素剤、免疫療法剤も用いられるようになって来た。今回の研究会の指定演題である免疫療法剤によるネブライザーも、いろいろな施設で実験的、臨床的研究が行われ、有効であること、副作用のないことが報告されて来た。

この群の5題はブロンカズマ・ベルナについての研究である。佐藤らは、注射用液を生食を用いて稀釈し、超音波ネブライザーで噴霧した場合のエアロゾル粒子の径を測定した。島田らは同様に稀釈した液6mlで週2回、8週間以上治療を行った臨床成績を報告した。自覚症状に関して中等度以上の改善は86%に達したと述べている。注射と同じような機序によるものかどうかの解明を、種々の血液検査によって試み、Fibronectinの上昇を認めている。マクロファージ活性やオプソニン活性の使用前後の変化は不明とのことであった。世良らも同様な方法での治療結果を報告したが、自覚的には45%、他覚的にも約30%は改善し、中でも鼻汁の量や性状が最も良い改善率を示したと述べている。そして、改善を来すメカニズムは網内系の活性化による気道防禦機構の変化であろうと推察している。早田らの投与方法も同様で、Fibronectinの変動に注目しているが、使用後に明らかな上昇を認めている。熊谷らは前回の研究会に続いて、犬に於ける吸入後の気管・肺の組織学的変化を報告した。蒸溜水、0.4%フェノール12倍稀釈液、ブロンカズマ・ベルナ注射液120倍稀釈液を、マスクを用いて3分間、3ml吸入させた。肺胞壁の肥厚、肺胞内浸出物、細胞浸潤等が観察されたのは、ブロンカズマ・ベルナの吸入を行った場合のみであったことを報告した。前年の実験では吸入量が多かったため、組織変化が強く出現したが、今回吸入液の種類による差を確認し得たことは興味深い。

ネブライザー使用の利点は、使用法が簡単で苦痛がなく、副作用の心配も少なく、局所に高濃度の薬液を到達させることが可能なこと等であろう。従来注射によって使用されていた免疫療法剤をネブライザーによって局所に使用し、注射同様、或はそれ以上の効果のあることが、以上のように報告された。しかし、その機序は明らかでない。鼻粘膜や下気道の粘膜から吸収されてから効果をもたらすのか、局所で直ちに作用を起すのかは分っていない。この点は局所療法の安全性と共にこれから解明されねばならないことである。エアロゾルの側から、粒径、チューブの管径や長さ、1回の投与量、投与速度など、投与条件の差によって生ずる変化の有無の確認も必要であろう。これは、工学部の先生の協力も得て研究が進められていることは発表された通りである。また、投与を受けた側から、エアロゾルが通過した各部位の形態的、機能的变化、更には全身への影響も観察されねばならない。会長が指定演題としたのも、その意図があったものと思われ、各演題はそれに即したものであった。今後の研究の一層の発展を期待している。